
GATE

杉 御零

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G A T E

【Nコード】

N 5 5 2 8 Y

【作者名】

杉 御零

【あらすじ】

普通ではない力を持っていた宮野 修治は、ある日“魔物”に襲われる。そこを美少女に助けられ、GSSCという組織の存在を知る。修治は自分の力が“魔物”を惹き付ける事を知らされ、組織に勧誘されるも、それに応えられない。だがついに、修治の学校にゲートが出現し。 。 戦闘パート、日常パートあり。基本、チート主人公です。ハーレム予定。不定期更新です。

魔物襲撃

え、マジで？

キーコ、キーコ、キーコ。

午後10時過ぎ公園。只今俺はコンビニの帰りでなんとなくブラ
ンコを漕いでいる。

暗い公園に響く音が地味に怖い。

俺の名前は宮野^{みやの} 修治^{しゅうじ}。高校1年生で近くの天野岩屋^{あまのいわや}高校に通っ
ている。通っている身ながら凄^{すご}い名前の高校だと思っ

ーと、1人語りに入りかける。
ふう、危ない所だった。

またなんとなく辺りを見渡す。
すると、現実^{現実}に意識が復帰した事で目の前の異変に気付く。

俺の正面のあたりの闇が渦巻いていた。
よく見ようと目を凝らす^{凝らす}が暗くてよく見えない。
そうしている間も闇は渦巻きながら大きくなっていた。
俺の本能はガンガン警鐘を鳴らしている。

が、やはり好奇心の方が上回った。
やっぱり気になるよな、こういうの。

そんなんで、観察する事にした。

しかし、闇は予想以上に大きくなった。

最初、地面から膝くらいまでだったのが、既に3m程にまでなっ
ていた。

どこまでデカくなるんだ？

もう帰ろうかなー。そう思い始めた時だった。

闇の中から何かが現れた。

それは始めはぼんやりとした輪郭だけだった。だが、次第にくつきりとしてきて、最終的にそこに現れたのは巨大な門だった。

2 m 強の巨大な門。

公園にあるにはあまりに異質な物だった。

数秒間固まった。

無理もないと思う。言い訳をする訳ではないが、この状況で冷静な奴の方がおかしい。だから俺がフリーズしてしまったのも仕方がない筈だ。

たとえそのせいでその次に起こった事に対処出来なかったとしても。

ギイ

門が開いた。

それにーヤバい、なんか魔物っぽいのがww じゃなくてわらわら湧いて出て来た！

魔物達はすごく強そうだ。動物っぽい奴もいるが、明らかにこの世界の生物ではない異形も見受けられる。

コマンド、逃げる。

しかし、回り込まれてしまった！

コマンド、戦う。しかないか、嫌だけど。

「ゲルオッ！」

イノシシの様な魔物が吠えて突っ込んできた。イノシシだから突進って、愚直だな。

さて、どうするか。

相手はイノシシといっても化け物だ。突進も見たとこ最低でも100km/hくらい速度がでている。まともに食らったらマズい。

しょうがない、奥の手を使うか。出来れば使いたくなかったんだが、今はそうも言ってられまい。

「プロテクト！」

俺がそう発声すると、青白い盾が現れて俺を守る。

突っ込んできたイノシシは頭をぶつけて碎けて死んだ。

まず

一体？

まあ、イノシシの事は兎も角、この障壁精製が俺の能力だ。

門の方を見やると更に魔物達が湧いてきていた。

俺は魔物達に向き直って見据える。

「っしやあ、どんどん掛かってこいやっ！」

魔の群　一匹見たら百匹いると思え！？

20分後。

「ぜえ、はあ。くそつ、もう無理だ！」

結局、200匹程殺した所で俺は勝てないと悟った。
何故かって？

いや、だって卑怯だろ敵。殺しても殺しても湧いてくるし。

という訳で現在、能力でドーム状の防護壁を造って籠城中。
俺は自分の能力には自信がある。

この壁は滅多な事では壊れないと思っている。

壊れないとは分かってはいるが、分かっているても、障壁に張り付いてくる魔物を見ていると生きた心地がしない。

俺の障壁は半透明だから向こう側が見えるのだ。

コンビニ弁当、食うのやめようかな。

醜悪な魔物のせいで食欲は失せていた。

更に10分後。

「生きて帰れんのかな？」

不安になってきた。

障壁は破られない筈。でも、ずっと閉じこもっていたら恐らく餓死する。

それまでに助けが来るか？

兎も角、何時まで籠城するかは分からないが、食料はコンビニ弁当1つ。飲み物は家にあるからと買わなかった。

うーん、喉渴いた。

それより、暇だ。

食料問題とか考えて気を紛らわそうとしてみたが喉が渴いただけだった。

そろそろ本気で暇になってきた。

よって

脱出を試みる事にした。

突然だが、ここで俺の障壁について少し説明をする。

障壁は俺と相対的な位置に出現し、どんな力が加わっても動かない。

だが逆に、俺が動けば相対的に障壁も動く。

そこで俺は思いついた。

障壁ごと駆け抜け、魔物を掻き分けて逃げよう！

脱出作戦決行！

更に更に10分後。

結論から言うと駄目だった。

俺がいくら逃げても、足の速い、もしくは飛べる魔物が追いますが

つてきて魔物の群れから抜け出せない。

それに、今もそうだが、何百匹という魔物が障壁に張り付いていて周りが見えづらい。結果、沢山走ったのも公園の中をぐるぐるしただけだった。

「マジで無理かも、　　つて、あれ？」

軽く諦めムードになりかけた時だった。

俺の目が信じられない光景を捉えた。

少女が1人、公園の入り口に立っていた。それも、かなりの美少女。今は美少女とか気にしている場合じゃないか。

髪は水色のショートヘアで、おとなしそうな整った顔に眼鏡をかけた、線の細い華奢な体型の少女だ。

と、つい少女の観察をしてしまったが、俺はそこで重大な、しかし至極当然の事に気がついた。

あの娘危なくね？絶対魔物に狙われると思う。

すると

「グララララ！」

「キシャー！」

「ブモオウ！」

俺が恐れた通り、魔物達が少女に気づいてしまった。そして案の定、魔物達は少女に襲いかかっていった。

少女の姿が魔物の群れに埋もれて見えなくなる。

俺は最悪の状況を予想し、思わず目を閉じた。

しかし直後、俺の予想は見事に裏切られた。それも、予想だにしない方向に。

ドツガアアアアアアアア！

轟音が鳴り響いた。

というか今の、魔物が出す音じゃないよな？
ということは

恐る恐る目を開く。

するとそこには荒野、いや、焦土が広がっていた。
そこに1人立っている少女。

この事からわかるのはただ1つの事実。

あの少女が一撃で数百匹の魔物達を消し飛ばしたという事。

「どんだけ強えんだよ
」

思わず驚きが口からもれてしまう。

それ程圧倒的な、理不尽な強さだった。

少女の攻撃はほとんどの魔物を消し去っていた。

あまりの驚きに気付くのが遅れたが、俺の周りの魔物達も1匹残らずいなくなっていた。

というか、俺もこの防護壁が無ければ消し飛んでたよな？

少し恐ろしい想像に軽く身震いする。

そんな俺の事に気付いているのかいないのか、少女は俺に見向き

もせず、真っ直ぐ門に体を向けた。

「ゲート、補足。目標、破壊します」

少女が喋った。

声も可愛え！ じゃなくて、ゲートって言ったな。やっぱりあれは門なのか。

「攻撃、開始」

少女は、そう言い右の手の平を突き出す。

直後、

ドガン！ズドン！ズジャー！

俺の拙いボキャブラリーで言うとなんな感じに、少女の手の平からビームが何発も放たれた。

ビームは俺の障壁に似た色をしていたが、防護的な俺の能力と比べると随分暴力的だ。

先ほども同じ様な攻撃を放ったのだろう。魔物達を一撃で消し去ったのも、これを見れば納得出来る。

そのビームをもろに受けた門、ゲートといったか。まあ、そのゲートの方は、勿論耐えられる訳もなく消し飛んだ。

周りを見ると、何とか生き残っていた魔物達が塵になって消えていった。

ゲートが無いと生きていられないのだろう。

「破壊、完了しました」

少女はそう言った。恐らく先ほどからのも含め、マイクが何かで報告しているのだろう。

かつこいー。それに美少女（そろそろしつこいか？）。

その様な事を考えて見ていると、少女はこちらに歩いてきた。

「」

少女は俺の目の前に来ると、じいーっと俺の顔を覗き込んできた。

「えっと」

俺は何か言おうと試みる。が、何と言えば良いのか分からない。どうしよう。

。

そうだ。

とりあえず、まずは助けて貰ったお礼だ！

「ありがとうな」

「」

しかし、少女は何も言わない。これでは間が持たない。

どうしようかと考えていた時だった。

ブロooooooooー、キィ。

公園の入り口近くに黒いボックスカーが止まった。
少女は車の方を見て、再びこちらを向いた。
そしてようやく口を開いた。

「　　ついてきて下さい」

「へ？」

いきなり言われた事が理解出来ず、一瞬戸惑う。
すると少女は俺の手を引いて歩き出した。

「えっ？ちよっ、まっ」

強引に引つ張られ、ボックスカーの近くまで来る。

「待っていて下さい」

そう言つと少女は車の中にいた人と何か話し出した。
しばらくすると、少女は車のドアを開けた。

「さあ、早く」

乗れという事か？

躊躇していると、再び手を引かれて車の中に乗せられそうになる。

「俺、帰れんなきゃいけないから」

仕方がないので、そう言つて逃げようとしたのだが

「っ！」

少女がその細い腕からは考えられない様な力で俺の手を掴んでいて離れない。

「たゝすけてゝゝ」

結局、車に乗せられてしまった。

特殊部隊GSSC 秘密組織って本当にあるんだ!?

数十分後、どこかのビルについた。

見た限りは変わった所はない。よくある普通のオフィスビルの様だ。

「ここは?」

「ゲート破壊工作特殊部隊GSSC、日本支部本部です」

はい?ゲート

破壊?特殊部隊?

えええ。

なにそれ!?

俺、混乱の極み。

無駄に長い名前の、よく分からない場所に、理由も知らされず連れてこられたこの状況。

なにこれ!?

俺の混乱をよそに、少女はビルへと入っていく。

もうここまで来たら行くしかないよな。

俺も覚悟を決める事にした。

俺は少女に続いて自動ドアを通りビルへと入る。

と、そこで、少女に声をかける者がいた。

「あつ、No.7。任務は終わっ、って、え?修治!？」

ところが、話の途中でいきなり俺の名前が出てきた。

俺は反射的に顔を上げ、相手の顔を見る。

って、光？

そこに居たのは俺の幼なじみの少女、朝霧 光だった。

光とは小学校入学当初からの付き合いでけっこう仲がいい。

外見的特徴を言くと、髪型は腰まで伸びた黒髪、顔立ちは大和撫子といった様で和風の美少女だ。

そこまでは良かった。

そこまでは俺の知っているいつもの光だ。

だが、目の前にいる光は何故か巫女服を着ていた。

何故に巫女服？それにここ神社じゃないし。

まあ可愛いからいいか。可愛いは正義！

そう言っ て許せる程に、光に巫女服は似合っていた。

話が脱線した。

それより、何で光がここに？

「何で修治がここにいの！？」

思っていたのと同じ事を言われた。

まあ、この状況なら誰だってそう言うだろうな。

それにしても、大して動じてない俺すごくね？

短時間に沢山驚いたせいで驚きに対して免疫が出来てるのかもな。

だからもう、光がここにいるという事実を受け入れるだけだ。

だが、光はそうはいかなかったらしい。

「どうということなの、No.7!？」

少女に対して凄い剣幕で問う。

しかし、それに対し少女は少しも表情を変えずに答える。

「作戦中にこの方から強力な魔力を感知しましたので、隊長に報告するつもりで連れて来ました。では、急ぎますので」

そう言い、少女はスタスタとエレベーターの方へ歩いていった。

それをぼけーっと見ていると光が俺に言った。

「ほらっ、あんたも行くのよ！話は明日聞くから」

「えっ？ああ 分かった」

光に言われて気付いた。

俺も行くんじゃないか。

少女の後を追いかけて、俺も急いでエレベーターの方へ向かう。

少女について行くと、扉からして他の部屋とは違っていると分かる部屋の前に着いた。

中にいるのは恐らく組織内でもけっこう位の高い人だろう。

こんにちは。

少女が扉をノックする。

「どうぞ」

中から返事があった。

誰なのか聞かずに入室を許可するとは、よほど組織内の人達を信頼してるんだな。

もしくは監視カメラで見ているか。

部屋に入ると、中は社長室の様な雰囲気（あくまでも“雰囲気”だ。実際に社長室なんて見たことないからな）になっていてまたまた社長の様な雰囲気の人が座っていた。
その人は20代くらいの男で、イメージ的にはやり手青年実業家といった感じだ。

男に向けて少女が話し掛ける。

「対魔法生物殲滅兵器アンドロイドNo.7、帰還しました」

アンドロイド？まあいい、この事については後で聞いてみるとしよう。

「お帰り、No.7。それと そちらの方は？」

男が少女に言葉を返す、更に俺の方を見て問いかける。

ここはきちんと挨拶しなければ。

「こんばんは、宮野 修治と申します」

キリツと、格好良く言えた筈。

それに対して男の反応は

「はい、こんばんは。」

「うちの職員じゃないよね？」

微妙だぁー！

凄い微妙な反応帰ってきた！

がつくり。意気消沈。

「作戦中にこの方から強力な魔力を感知しましたので、隊長に報告するために連れて来ました」

俺の落ち込みはいざ知らず、少女は男（隊長らしい。これからはそう呼ぶようにしよう）に光にしたのと同じ報告をした。

「そうか、ふむ」

隊長はそれを聞き、少し考える。

そして、真っ直ぐに俺を見てきた。

その表情は真面目そのもので、場の雰囲気が一気にかたくなった。
重苦しい沈黙。

そして男が口を開いた。

「面倒くさい説明は省いて単刀直入に用件を言わせてもらつよ、宮野 修治君」

「いや、説明はして下さい」

「」

――沈黙。

隊長は露骨に嫌そうな顔をした。

俺は悪くないよな？

誰だつて説明なしで判断などできない。説明を求めるのは当然の事だ。

それに、隊長、面倒くさいって言つてたよな？ただのわがままじやねえかっ！なんか俺の方がわがまま言つたみたいになつてるけど。

「しょうがないな、じゃあまずは説明から始めるよ」

今、しょうがないって言つたよ。どこまで面倒くさがりなんだよこの人。

「んー、まずこのビルだけど、ゲート破壊工作特殊部隊GSSC日本支部本部として使わせてもらつてる」

これはさっき少女からも聞いた事だ。

「ところで、No.7が連れて来たつて事は君も何か力を持つているのかな？」

力つていったら、障壁精製のことだろう。

「はい」

答えるが隊長に反応は特にない。

俺がYesと答えると分かっていたのだろう。

「それで、君も見たんじゃないかな、大きな門と魔物、もしくは魔物だけでも」

「見ました」

「そうか、良く生きていたね。あの位の大きな門になると出て来る魔物も強いからうちの戦闘員でも3人位で壊すのに」

マジ？

実はそんなヤバイ状況だったのか。

兎も角、と、隊長は話を続ける。

「我々は、その門と魔物達を殲滅する事を仕事、いや、責務として
いる」

そうか、この組織があるから今まで俺達一般人は被害も無く、知りさえしなかったのか。

しかし、と、そこで少し悔しそうに隊長が話し出した。

「しかし 我々は未だ、魔物の行動目的やゲートの出現場所など多くの事が分かっていない」

隊長はそこで一旦話すのを止め、言いづらそうに続ける。

「ただ、最近になって分かってきたんだが、魔物は君の様に強い多くの魔力を持った人に惹かれている事は分かっている。だからこれから君の周りではゲートがひらくだろう」

これで大体話が読めてきた。

ゲートの開く場所がある程度把握し、ゲートと魔物を殲滅するた

めに俺にこのGSSCという組織に入れというつもりだろう。

とりあえず今は先手を打っておく事にするか。

「だから、俺にもこの組織に入れと？」

そう言つと、隊長は一瞬驚いた顔をしたが、すぐに元に戻つた。

「最近の子は頭の回転が早いねえ、話が早くて助かるよ。ここ最近、魔物達をが活発化してきてね、我々としても戦力は多い方がいいんだ」

正直言つて迷う。

戦えるのに戦わないのは怠慢言だろうか。

俺も人類を守るといふのは懂れる。だが、これは現実だ。戦いの最中で死ぬことも有り得る。

俺は――、

「考えさせて下さい」

決断はできなかった。

この場で簡単には決められない。

すると隊長は少しがっかりした顔をした。

「そうか、やはり今すぐつてのは無理か。じっくり考えてくれ。じゃあしばらく、護衛を兼ねた監視役を派遣しよう」

「監視役？」

「ああ、今後君の言動には少し制限がつく。この事やゲート、魔物の事は喋ってはならない」

思えば当然の事だ。機密組織なんだし。
それにしても、監視役とはな。誰だろう、光かな？

「話は以上だよ。遅くまで済まなかったな。No.7、彼を送って行ってやってくれ」

「了解しました」

俺は少女の後についてビルを後にした。

ビルから出ると少女はこちらを振り向きもせず、スタスタと歩いていってしまう。

俺も慌てて追いかける。

こうして俺＋同行者は家路についた。

スタスタスタスタ。

少女はただひたすら歩いている。

GSSCのビルからここまでずっとこの調子で、無言で歩いてきた。

正直言って気まずい。

何か話題が欲しい。

「なあ」

とりあえず話し掛けてみる。

英語の先生が言っていたが、海外旅行をしたらとりあえず外国人に話し掛けてみるべきらしい。いざ話せば、話す事は後から幾らでも浮かんでくるという事らしい。

しかし、

「何ですか？」

「あ、あのさ、あの」

何も浮かばなかった。

「？何でしょう」

少女が不思議そうに聞いてきた。

ええっと、話題話題。

あ、そうだ。

「俺、本部のビルの場所とか見たけど、帰り目隠しとかしなくていいのか？」

ふう、なんか思いついたぜ話題。

「何故　ですか？」

「いや、口外したらまずいだろ？」

俺がそう言つと少女は小首を傾げ（可愛え！）聞いてくる。

「口外するんですか？」

そうくるか。

「いや、しないけど」

「なら大丈夫でしょう？それに」

何この無償の信頼！

嬉しいけど、こんなにあっさり信頼されちゃっていいのか？

あれ、でも今、それについて言ってたよな。

嫌な予感。

恐る恐る聞いてみる。

「それに、何？」

「それに　監視役も付いていますから」

ガッデエーーム！

信頼されてねえ！

それに怖えよ！新手的脅しかつ！

スタスタスタスタ。

そしてまた無言。

この空気なんか嫌だ。

スタスタスタスタ。

何か話題　は、もういいか。

スタスタスタスタ。

あ、家の近くだ。

「家の近くまで来たからもういいよ、ありがとう」

「そうですか、分かりました。では、^{それがし}某はこれで」

ん？某と言ったか。古風な一人称だな。

そついや、この娘の名前知らないや。

「ちよつと待った」

帰ろうとする少女を呼び止める。

「そついえば自己紹介してなかったと思ってさ、俺の名前は宮野修治」

「知っています。先程、隊長に名乗っていたのを聞きました」

知っているのなら形式的なものとして受けとめてくれれば良かったんだが。

「君の名前は？」

そう聞くと少女は一瞬、迷う様な、躊躇う様な素振りをみせ、そして俺の問いに答えた。

「某は名を持ちません」

特殊部隊GSSC 秘密組織って本当にあるんだ！？（後書き）

1話、2話が短かったのに対し、3話は少し長めになりました。
4話は少し短めになる予定です。

機械少女と名前 名付け親は俺！？

「某は名を持ちません」

その言葉の意味をすぐには理解できなかった。

名前を持たない人などいない筈だ。そもそも名前が無ければ戸籍登録さえできない。

「それってどういう」

俺がなんとか疑問を口にすると少女は答えた。

「某は人ではないので名を持ちません。機体名ならありますが。機体名は“対魔法生物殲滅兵器アンドロイドNo.7”です」

少女が更に口にした事は俺の疑問を増やしただけだった。

どういう事だ？全く理解できない。

とりあえず聞くか。

考えても分からない。

「人じゃないとか、機体名とか、どういう事だ」

「それは――、

少女は自分について語り出した。

話は1時間程続いた。外で立ち話するには少々長い時間だった。

聞いた話を要約する。

今もあまり居ないが、元々GSSCにはほとんど戦闘員が居なかった。

そこで出た改善案の一つに、ロボットに戦わせるといったものがあった。

そして、試作機プロトタイプのNo.1、No.2が作られた。それらはあくまでも試験用で、実戦には向かなかった。

その後戦闘に特化させたNo.3、No.4が作られた。それらは普通の相手ならば、単騎で一個師団を10分で壊滅される程の実力があつた。しかし、魔物には勝てなかった。

そして、研究員達が自棄やけになつて極限まで強化したNo.5。その作成の為に兵器に関する国際禁止条約の7割を特例で無効化したそれは、単騎で大陸1つ滅ぼすとさえ言われた。

人類の技術の粋たるNo.5は、ゲートを2つ破壊する事に成功した。しかし、3つ目を破壊する際に強い魔物が現れ、激闘の末に破壊された。

その時の魔物を見て、司令部の人々が口を揃えて「悪魔かつ！」と言つたらしい。

悪魔じゃなくて魔物なだけだな。

これ以上のものは作れないと言われたNo.5でさえ勝てなかった為、ロボットでは魔物には勝てないと考えられ始めた。

そのうち、ロボット計画自体が諦められかけていた。

そんな時だった。“魔力”の発生方法が発見されたのは。

これまでのデータから、魔物に有効打を与えられるのは魔力を使った攻撃だけだと分かっている。

そして当初は魔力を持つのは人間だけで、能力を使い戦闘ができるのは強く多い魔力を持つ者だとされていた。

後半はあっている。だが、前半は違った。魔力を持つのは“人間に限らず“心を持ったもの”だという事が後から分かったのだ。

そこからは早かった。僅か1ヶ月で“心を持つ”^{A I}人口知能が開発された。

それはすぐさま軽量化され、ロボットに搭載された。ロボットは感情面の関係で人型となった。

こうして、歴史上初の心を持つロボットが作られた。それがN o . 6。⁶

凄まじい発明だったが、N o . 6は軍事最高機密として公開されなかった。

N o . 6はロボットにして“心”を手に入れた。

だが、最初は能力を使えなかった。

魔力が少な過ぎたのだ。

結果としてN o . 6は改良を施され、人為的に魔力量を増やされる事で能力を使えるようになった。

そして、N o . 6のデータを元に戦闘用に作られたのがN o . 7。
この少女だという。

これで謎が解けた。

隊長と話した時アンドロイドとか言っていた理由も、ようやく分

かった。

それにしても、にわかには信じがたい話だ。

だが、幾ら信じがたくともこれが真実なのだろう。

それと、少し気になった事があった。

「なあ、俺達と同じで心があって感情があるんだろ？ だったらさ、名前が無くていいのか？ 欲しくなんないの？」

正直、失礼な質問だと思う。だけど俺は、思った疑問をそのまま伝えたかった。

そして、正直な気持ちを答えて欲しい。

すると少女は、少し考えるようにした後、俺の問いに答えた。

「分かりません。心があります。感情もあります。ですが、それがどの様なものか分からないのです。だから某は、名前が欲しいのか欲しくないのか分かりません」

自分の気持ち分からない、か。

それはどんな事だろう？

嬉しくても嬉しいと分からない。頬を伝う涙の訳も分からない。

俺も自分の事ではないからはつきりとは言えないが、それはきつと寂しい事だろう。

できる事なら、この少女に“気持ち”を知ってもらいたい。沢山喜んで、沢山悲しんで欲しい。まあ、悲しみは少ない方が良いが。

決めた。

俺はこの感情を知らない少女に本当の“心”を知ってもらおう。

そのために今できる事をしよう。

「そうか。でも多分、名前があったら嬉しいと思う。別に嫌ではないだろ?」

「はい。嫌では ないと思います。もしかしたら、嬉しいかもしれません」

「じゃあさ、俺が考えてやるよ、名前。いい?」

「貴殿が名前を? あなた 変なのは嫌ですよ?」

「ああ、任せろ」

名前か どんなのが良いだろうか。

そうだ、No.7だから

「ナナってのはどうだ? No.7だからナナ。そのまんますぎるか
な?」

「 ナナ。某の 名?」

少し不安そうに確認をとってくる。

俺は出来るだけ頼もしそうに一言答える。

「ああ」

俺がそう肯定すると、ナナは、花の様な　とまではいかないが
確かな微笑みを浮かべた。

感情が分からないとか言ってたけど、十分笑えるじゃん。

「じゃあ、またな。ナナ」

「はい！」

名前で呼ぶと更に嬉しそうにして帰っていった。

そして俺も帰路へついた。

> i 3 5 4 3 1 — 4 4 6 1 <

死を呼ぶ力 非情な現実と確かな覚悟

あの日から数日、何もなかったかの様に普通の日が続いた。

光に教室で会った時に巫女服について聞こうとしたのだが、「
あ、この間の巫女ふ」
と云った所でこの世の者とは思えないほどの圧力を放ちつつ睨まれたので聞くのは止めた。
いや、あれはマジで怖かった。

そして、あつという間に2週間が過ぎた。

あの日からちょうど2週間と1日たった今日。
現実、俺は寝坊して遅刻しそうになっていた。
とはいえ、ギリギリだが一応学校には着いている。あとはHR^{ホームルーム}までに教室に滑り込めばOKだ。

という訳で教室へと急ぐ。
と、そこで異変に気づいた。

教室の方がやけに騒がしい。
学校なのだから多少騒がしくともおかしくはない。
だが、今日の“騒がしさ”は何時もとどこか違った。

何とも言えない不安に掻き立てられ、教室へ向かう足が早まる。
教室へと近づくにつれ喧騒は大きくなっていく。

そして、俺の耳が悲鳴を捉えた。

ふざけた悲鳴ではない。心の底から恐怖した様な、そんな悲鳴だ。

これはただ事では無い。

そう判断し、教室の方へと駆けだした。

いや、駆けだそうとした。

しかしすぐに俺は足を止めた。

何故なら、教室の方から大量の生徒が一気に走ってきたからだ。

あれは、逃げているのか？

沢山のクラスメイトが駆けてくる。

「おいっ！何が起きた！？」

叫ぶ様にして問い掛ける。

そうでもない！この状況では聞こえない。

「ばっ、化け物が出て、それでっ！逃げ遅れた奴をっ！お前も、早く逃げる！」

クラスメイトの加藤という男が答えてくれた。
そしてすぐに脱兎のごとく駆けて逃げていく。

今、加藤が言った“化け物”という言葉。

思い当たるのは1つしかない。

恐らくは、

――魔物化け物の事だろう。

「ちくしょうっ！」

思わず悪態をつく。

何で、何で今日なんだ！

何で俺が遅刻した日につ！

恐らくもう何人かは死んでいる。

俺がいたとしても守れたかどうかは分からない。

だが、守れたかもしれない。

しかし現実として俺は遅刻し、クラスメイトを守れなかった。

後悔の念に駆られながら、もう人気のなくなった廊下を駆け抜ける。

目的はなかった。ただ走る。
もう何も考えなくなかった。

曲がり角を曲がる。

「っ！」

そこで思わず息を呑む。

そこには、地獄が広がっていた。

まず最初に感じたのは、吐き気を催す様な濃厚な血の匂い。

そして、床に横たわるクラスメイトの死体。

顔が原形を保っていて確認できるのは3人、かなり仲の良かった奴もいた。

皆、体中貪り喰われた様に千切れていた。

友人の側に膝をつき、瞼を閉じさせる。

恐怖に染まったまま、もう動かない目を隠す様に。

俺にはもう見ていられなかった。

「喜多　、浜路　」

友人達との思い出が脳内にフラッシュバックする。

そして、目の前の友人達の姿が目映った瞬間――、

俺の中で怒りが爆発した。

まるで、火山の噴火の様に。

悲しみ、後悔といった感情など塗りつぶして、俺の心の中を憎しみ、憤怒といった感情で埋め尽くした。

そして俺の下した決断。

友の死を背負う覚悟。

魔物共を一匹残らずぶち殺す。
それ以外は考えられなかった。

死を呼ぶ力 非情な現実と確かな覚悟（後書き）

すみません！

5話の更新地味に遅れました！

さて、それと報告です。

4話にナナのイラストを載せましたー！（パチパチー）

是非、見て下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5528y/>

GATE

2011年11月21日12時30分発行